



ラオスは、今 —ラオスの結婚式とラオス時間—

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●シャンティ国際ボランティア会（SVA）・アジア地域ディレクター

ラオスを最初に訪問したのが今から約30年前の1984年。まだ、ラオス社会主義革命後の旧ソ連を中心とした東側の援助が大半を占めていた時代で、外国人が宿泊出来るのは、一ヶ所のホテルだけであり、ヴィエンチャン市内の中心から約10キロ以内と移動が制限されていた。それからラオスに駐在したのは、20年後の2004年から2006年の3年間。旧ソ連は崩壊してその影は殆ど消えて、日本や西側、中国を中心とした援助の時代となっていた。それでもまだ、首都ヴィエンチャンでも交通渋滞は全くなかった時代であり、市内にも日本料理店は3ヶ所だった。

10年前は、日系の企業も大手の商社やゼネコンを中心に17社で、大半の駐在員がカンボジアとラオスを一人で兼任していた。それが、今や日系の企業の本数は、2010年に65社、2013年には100社を超えた。タイ等に比べて労働者の人件費が3分の1という安さと、タイの近年の政情不安や、洪水等のリスクを分散する日系企業が増えたこと等が原因だ。ラオスも最近10年間で、一人当たりのGDPは4倍にも増えた。ヴィエンチャン市内は、交通渋滞が日常茶飯事で、車の駐車場が不足して、路上の片側を潰して駐車させる事態にまで深刻化している。日本料理店もヴィエンチャン市内には約30軒と急増した。

約3ヶ月ごとに訪れるヴィエンチャンも、訪れる度に新しいホテルと洒落たレストランが増えて

いる。こんな急激に変わりつつあるヴィエンチャンで、今年6月、ラオス人の友人の妹さんの結婚式に招待されて参加した。ラオスの結婚式は、普通は朝の親族を中心とした結婚の儀式で始まる。日本でいう結婚式の披露宴は、夕方行われる。

ラオスの結婚披露宴は、とにかく盛大な「ハデ婚」が伝統的。ヴィエンチャンの中流層の人たちでは500人から1,000人規模の披露宴が一般的で、披露宴の開始時刻は、招待状には大抵夕方6時と書いてある。しかし、招待客は、1時間半から2時間遅れて行くのも伝統でラオスの常識である。ラオスの友人の話では「披露宴は夕方6時に必ず開始するから時間通りに来て下さい」とのことだった。「それはまさかないでしょう」と確認すると、「新郎新婦は国連職員同士で国際派なので国際時間です」と自信たっぷりだった。

半信半疑で披露宴の当日、約束の夕方6時に会場のホテルに到着したが、会場には新郎新婦の親族関係者しか見当たらなかった。ラオスの友人は、バツの悪い顔をして「おかしいですね。皆、6時に来るといっていたんですが」と一緒に最初の10分だけテーブルに座ってくれた。1,000人は入る会場のテーブルで結局、一人で1時間半、ビールとワインを飲みながら待った。7時半に新郎新婦と親族が前に出て紹介されて、披露宴がスタートした。この時間になると全てのテーブルが埋まっていた。



ラオスの結婚披露宴

結婚披露宴の開始時刻は、ラオスの周辺の国、タイでもカンボジアでもだいたい似たような時間であり、大都会のバンコクでも1時間遅れで行くのが常識である。カンボジアも、ラオス同様の時間で、どの国も基本的には、新郎新婦の席はなく、招待客に挨拶し、各テーブルを回って、挨拶と乾杯と記念写真の撮影が普通である。

ラオスの結婚式らしいのは、とにかく招待客の歌あり踊りありと賑やかなこと。1,000人の招待客と会場が一体となって踊るのは壮観である。そして、極めつけは、女性でもお酒をたくさん飲むことである。田舎ではラオス焼酎とビールが中心であるが、この日は、さすがに国連職員の披露宴だったので、ビールに加えてワインとウイスキーが中心であった。新郎新婦の友人の女性たちが、酔いが少し回るワインで乾杯の嵐となり、歌と踊りと乾杯が夜の11時、12時までと続いていた。

この風景、どこかで見た風景だと思った。10年前のラオス駐在時代に、農村での建設を支援した小学校の開校式となると、朝から昼、そして、夕方まで帰してもらえないで歌と踊りと乾杯の連続だった。若い村の先生や娘さんたちが、「献杯致します」と口上を述べて乾杯、そして、飲むことの繰り返し。東南アジアの女性で、お酒が強く飲む量が最も多いのはラオスではないかと確信を持っていたほどだ。どんなに経済的には貧しい地方の村に行っても、基本的にこの伝統的スタイルは

変わらなかった。

ラオスの人口、640万人の中で農業人口は7割を占める。ラオスは、癒やしの国ともいわれてきた。時間の流れが悠長でノンビリしていて、人々が優しいのが魅力だ。時間は自然と共にある。「タイム・イズ・マネー」の、時間イコールお金の世界とは別の価値で動いていた、熱帯の農村社会の典型だった。

ラオスは海がなく、中国、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイという5カ国に囲まれた内陸国で、「陸の孤島」「ランドロック」ともいわれてきた。しかし、来年2015年から始まる6億人の「東南アジア経済共同体」、中国とインドシナの周辺国を網の目のように結ぶ高速道路の整備による東西回廊と南北回廊の開通、タイとの間に架かるメコン国際架橋も4ヶ所目も開通と、中国の雲南省からバンコク、シンカポールまで陸路でつながる時代だ。

ラオスは現在、「陸の孤島」の障害から、逆に「陸と国をつなぐ中心国」へと変容しつつある。表面的には、大きく変わったラオスと首都ヴィエンチャン、しかし、ラオスの伝統の結婚式を見ても、ラオス時間とラオスの心は残っていた。これからさらに、ラオスの周辺はかつて経験したことがないように大きく変わる。

ラオスの時間と良き伝統を残して行けるのだろうか、優雅に踊る人々を見てそう思った。